



Heart to Heart

## 「諦めるまでは可能性」

2008 年度半期こうのとり外来の成績

編集後記

---

Sさん

納得できるところまでは  
トライする

**結**婚ししばらくすれば子どもは自然に授かると思った。体だって健康なのに何年経っても妊娠の兆候は現れてはくれなかった。29歳で結婚、本人はもとより周りも早く子どもを望んでいたのでも2年経った頃病院で検査を受けたいと夫に伝えた。夫は二人での生活でもいいのではと言ったが、調べてみたら夫側にやや問題ありという結果。それが夫には言いつらく、自分の中でも子どものいない生活もありなのかなと思うようにしていった。

結婚して8年が経った頃、友人の家で諏訪マタの資料を目にした。彼女も長年他の病院で治療を受けていたが、説明会のこと、病院の様子など教えてくれて私にも受診を進めてくれた。それを聞いた時、私の中で何かが動いた。

早速夫に話してみたところ、行ってみたらと言ってもらえ翌日には受診していた。他の施設には全くない、個人を配慮したシステムと緊張感のない空間でとても驚いた。初めから体外受精を希望して説明会を受けて、その場の真剣な空気、私達と同じような大勢の参加や吉川先生の治療に対する熱意で夫の心も動いた。

しかし、その時夫は43歳で私は38歳、採卵をするのは3回までと最初に決めて始めてみたら、思いのほか受精卵が多く出来たので、私の思いは先に先にと広がっていた。双子でもいいな、男の子女の子の子両方がいいな、何度も卵の写真を見ては着床していることを願った。そしていよいよ判定日。

診察室に入ると吉川先生が申し訳なさそうなお顔で「ごめんねー妊娠してなかったわ」と、おっしゃった。

努めて冷静にお礼を言ったあと車の中へ飛び込んで涙が溢れた。

「初めてなんだから仕方ない、それにしても駄目な時ってこんなに切ないものなんだ。何がいけなかったのだろう」とあれこれ考えてもやり場のない悲しみは収まりがつかなかった。

この時、以前手にしていた倶楽部 K を改めて読み直して、初めて、今まで掲載されていた方々の芯の想いを感じることが出来た私だった。

その後数回の移植をしたが結果には結びつかなかった。ある回の判定待ちの時、年配の知人に「また今回も駄目だろう」というような愚痴を言ったところこんなことを言われた。

「どんなに小さくて形は卵であってもそれも命じゃないかしら。お母さんになりたいあなた自身がそんな風に思っていたらかわいそう。先生でさえ、二週間経たないとわからないことをどうしてあなたにわかるの?」

ハッとした。先生もスタッフの方々も、主人もみな一生懸命してくれているのに、肝心な自分がこんなことを思ってしまったなんて。その後に向かえた判定日、結果を待つ間初めて相談室を訪れてみた。倶楽部 K ではよく登場してくる、「話すと楽に

なる」、というこの部屋。私自身の性格上心の内側を誰かに話すということは今までは出来ないものだったが、実際カウンセラーさんを前にしたら、自分の中に溜めに溜め込んできていた悩みや不安、疑問など次から次へと口をついて出て来た。

その中で、「妊娠に向かっの医療的プロセスは皆同じ。そこから先は自分の力ではどうしようもないこと、これは卵の力。それを信じて祈るのみ」というお話しが出てとても心に残った。

話し終わったらモヤモヤは消え、「あー、もっと早くここへ来ればよかった」と自分のプライドを恨めしくさえ思った。

そして呼び出しの電話が鳴り吉川先生の元へ。「妊娠しています。反応が出ていますよ」考えもしなかった先生からの言葉にまともな返事も出来ず、また車に行くと、やっと事の事態がわかって涙が出て来た。

その時の子どもの出産を終え、2年近くたって2人目を、と再び諏訪マタを訪れた。おかしな表現かも知れないが、「帰って来た」という感じがした。前回の凍結卵が2回分。それだけのチャレンジと決めて来た。移植後の毎日は長くて途中出血もあったので今回は無理かなと思いつつも、時間が出来ると以前からの倶楽部 K を引っ張りだしてきては読み返し、卵の写真を見ては、頑張れとつぶやいていた。

向かえた判定日、ものすごくラッキーなことに妊娠反応が出た。

子どもを持たない私だから、というのではなく、不妊と向き合った長い歳月で一番に浮かぶ言葉が「納得できるところまでは諦めなくて良かった」ということ。

外からはわからない子宮の中での出来事。何を努力していいかわからず、不安やイライラなどいろいろな感情が交錯する。だからこそ、せめて自分に出来ることの一つとして「卵の力」を信じて祈る、それは大切なことだと思った。そして先生の技術の高さ、スタッフの皆さんの温かさ、相談室や倶楽部 K の存在も諏訪マタならではの素晴らしいことだと思う。不妊治療は私達を強くしてくれた。命について、とても深く考える機会を与えてもらった。そして、自分の、また他の人の痛みというものについても考えさせられた。全てが貴重な経験となった。



## Kさん 吉川先生の“心配いらない”の 安心感

諦めるまでは可能性

**諦**めた時にふっと妊娠する人もいる、その言葉がまさか自分に当てはまることになるとは思いませんでした。諏訪マタに通って7年、40歳の誕生日で治療は「おしまい」と思っていた私だったのですから。

32歳の時内膜症のオペをした後、妊娠を望むならば体外受精と告げられ諏訪マタへ転院をして吉川先生と出会いました。治療を始めればすぐできるような気がしていた私は“いい卵だったのに反応が出ていないなあ。1回あけてまた生理2日目に”と繰り返される先生の言葉にどうして駄目なのか、いつまで自分はこの状態のままなのかと思っていました。そんな中で5回、妊娠反応は出るものの心拍が止まってしまう形での流産を繰り返し、先へ進めない切なさで胸が押しつぶされそうになりました。37歳の時には水のおりものが多くなり、先生との相談の末に卵管を取るオペをしました。これをきっかけに今度こそ妊娠できるかも、そう期待して望んだ直後の治療もあえなく撃沈。この次はこの次は、今度こそきつと……。過去5回の妊娠反応がまるで嘘のように、毎回毎回かすりもしない判定値の連続。

お前の気の済むまでやればいい、そう励まし続けてくれていた夫からも“経済的にもキツくなってきた。欲しい気持ちはあるが、そろそろピリオドを視野に入れて欲しい”と言われてしまいました。

「夫にああ言われたら、本当におしまいだ。もう諏訪マタ通いが出来ない。赤ちゃんを持つことを諦めなければならないんだ」

40歳の誕生日が一つの節目、自分でもそうは思いながら続けて来た不妊治療。その誕生日を目前に、私は今までにない強烈な不安な気持ちに襲われました。丁度、実家に家族が集まった時のこと。姉には3人、弟には2人、子どもが大好きで保育士になった私には1人も居ないその空間。普段はかわいい姪や甥の存在が、この日はとても辛くて、でもそこで泣いたらみんなに心配をかけてしまう、ぐっと堪えていつも通りに笑顔で振る舞い、家に戻って大泣きをしました。泣いても泣いても辛さは消えず、やりきれな

い思いは相談室へ予約をしてぶつけました。

「もう、諦めなきゃいけないんだ。でもどうやって諦めていいかわかんないんだよ。」

結論の出ない、ぐるぐる巡るばかりの気持ちを口にだしている内に段々と落ち着いて、もう一度ゆっくり考えてみる、そういうことになり家に帰りました。

次の周期生理2日目、今まで通り病院には居ましたが、治療はこれで最後になるだろう、そんな悲しい予感でいました。採卵は6個、うち5個が受精し5日目の胚盤胞戻しで2つの命のお迎えに行きました。判定日の数日前より出血があったので、これはいよいよおしまいだーと思いながらも、ほんの少しの望みを持ち吉川先生の元へ。“反応が出ているんだよ。順調なら次の診察であかちゃんの袋が見える”と笑顔。えっ!?と戸惑いながらもほっとしました。久しぶりの妊娠反応ですが、ここからが問題の私。次週2つの袋が見えたものの出血が収まらずそのまま入院になりました。止まりそうで止まらない少しの出血に今までの流産のことが思い出され、イライラと不安が募りました。しかし1人の心拍は止まってしまいましたが、もう1人は生き続けてくれました。夏の暑い最中ずっと入院していた私は、北京オリンピックの放送を見ていました。金メダルをとった選手達のインタビュー、“夢は必ず叶う”がとても重く響いてきました。

今、8ヶ月に入り体つきが日々変化しあこがれの妊婦になって改めて思います。吉川先生へ、感謝しても仕切れないくらいの感謝。先生の“心配いらない”“大丈夫”はどれだけの安心を与えて下さったか。そしてスタッフのみなさん、何より支え続けてくれた夫。みんなにありがとうございます。そして、本当に諦めなくて良かった、その一言が今一番言いたい言葉です。



Yさん

## どんな状況の時でも信じてる



**希**望を持って頑張るといっても、一人でいると不安になってくる。良い卵だったと聞いたのに判定結果はマイナス。年齢のせいでダメなのか、もっと若かったら悔しい気持ちになってもどうしようもない。父や母にも迷惑や心配ばかりかけている。

次も、またその次も駄目なんじゃないか、いつまで続くのだろう、いつになったら暗いトンネルの先へ行くことができるのだろう。どうしようもなく不安で、情緒が不安定になる。涙が出てくる。

いや、何を言ってるんだ、自分が自分を信じないでどうする、想い続けなくてどうする。

そんな思いに足掻いていた時夫はこう言った。“俺は今も信じてるよ。どんな状況の時でも信じてる。決して諦めない”。～

早く結婚し若いお母さんになるのが夢でした。でも結婚できたのが38歳。祖母も母も早い閉経なので不安で地元のS病院で診察を受けました。先生はとても親切にしてくださったのですが、待合室は総合病院なので妊婦や赤ちゃんを抱いた母親達ばかりで辛い待ち時間でした。その病院で夫婦での診察を進められたので不妊治療専門のK病院に転院しました。全国でも有名な不妊専門病院、結果はここでの治療は不可能とのこと。ここで駄目ならばこれから先どうしていけばいいのかさがる思いで院長先生に尋ねたのですが、その返事と態度はとても冷たいものでした。悲しくて切なくて夫婦で落ちこみました。

その後わずかな情報を頼りに、私達が治療を受けることのできる可能性のある病院を探し、諏訪マタニティークリニックにたどり着きました。最後の砦、まさにその言葉の通りもう本当にここしかなかった・・・。

最初相談室に電話で相談をさせて頂いたのですが、私達の今までの経緯についてとても親身になって聞いて頂きました。前の病院ですっかり医師に対しての怖さを持ってしまった私だったのですが、「うちの先生達は大丈夫」と言ってもらい、電話を切る頃には心の傷が癒えているのがわかりました。初めてお目にかかった時の根津院長先生は、本当に大丈夫、な方で私達目線で話を聞いて下さり素敵な笑顔をむけて下さいました。

私達は遠方なので諏訪マタへ来るのには片道10時間以上はかかります。体力的にも結構辛く、2、3日ぐらいは疲れがとれません。もちろん金銭的にも非常に大変です。それでも諏訪マタは、病院全体の温かさ、患者に対しての心配りなど全て他とは比べものになりません。だから頑張ってここまで治療に来られるのです。

2回目の治療で、数値は低いものの陽性反応ができました。1週1週気の抜けない通院となり、喜びと不安でドキドキしながら何とか8週目をむかえ、10週目には晴れて諏訪マタを卒業すると思った途端、

流産。次の日すぐに手術となりました。

吉川先生が心配していた頸管妊娠だったため、手術中、出血量が多くなり大変な手術になったようでした。

少し前なら子宮ごと摘出になっていたし、このまま妊娠が進んでいたら大変な出産になっていたといわれ、吉川先生と、赤ちゃんから私は命を助けてもらいました。

しかし、この流産をきっかけに今までは黙って見守ってきてくれていた両親に、年齢のこと、通院の負担などこれ以上治療することは反対だと言われ、その思いがものすごく身にしみて、申し訳なさやいろんな感情が湧き出てきてしまいました。

そんな中でも、もう一つだけ残っていた凍結卵を移植し、また低いながらも妊娠を示す数値が出ました。しかし、おなかの中で頑張っているはずの命に向かって“前回ダメになった回の時の卵だから、きっと弱いんだ。こんなことなら、今のうちにダメになり、新たに採卵からやり直し、良い卵で治療したい”という思いが私の頭に渦巻きました。

今までは、治療をしてもらえる施設と巡り会えた喜びが一杯で走ってこれたのですが、実際治療を体験してみて「不妊治療」の辛さを痛感しました。

両親が心配していること、自分の気持ちのコントロールが出来なくなって情けないこと etc、思いのままを夫にぶつけました。「人に言われて気持ちが揺らぐようなら、治療などしないほうがいい。」とかなり怒られました。そしてその時に「俺はどんな時でも信じてる。諦めない」と言われたのです。

私の非情な思いがお腹に伝わったのかすぐに妊娠反応はなくなってしまいました。この時一瞬でもダメになればいい、などという感情を持った自分を心底悔いました。

ここで治療を始めて一年。今回ギリギリですが、なんとか年内に治療を受けることができました。判定日は30日、昨年に続いて院長先生から判定結果を聞くことになりそうです。(お久しぶりにお会いできるのを楽しみに)

遠方から来る私達に“年末だから、道、混んじゃって大変かなー?”と、言葉をかけてくれた吉川先生。本当にお忙しい日々の中に、こんな風にふっと患者を気にかけてくれる吉川先生。そして毎回必ず診察前と診察後に寄らせて頂く相談室は、どんな些細な話しでも真剣に向き合ってくれます。相づちをうってゆっくり聴いてくれて、ホッとす優しい言葉をくれる。いつでも不安と隣り合わせで、気持ちが上下しやすい私達にはこういう場所がすごく心強く必要なのだと思いました。

信頼できる先生、諏訪マタのスタッフの皆さん、応援してくれる家族、友達がいる、だから一人じゃないと感じられるようになりました。二人が納得できるまで諦めない、諏訪マタに出会えた私は幸せだ、と心から思っています。